

GP特集：書評論文3

『地域福祉とコミュニティへのアプローチ』を読む

—地域福祉のローカルテキストとしての意味—

原 田 正 樹

本書は「地域社会の変貌を明らかにし、地域福祉への期待を述べ、地域社会を理解するための調査論とコミュニティワークの実際から構成」されている。地域福祉に類するテキストは数多く出版されているが、本書の特徴を4つの視点から整理してみたい。市販されているテキストと本書を比較して見ることで、これからの「地域福祉の教育」に関するヒントが含まれているように思われる。

1. ローカルテキストの試み

第1章の書き出しは、「山口県の高齢化率は全国のなかでも高い」である。まずこの高野先生の書き出しに驚いた。本文では、山口県の高齢社会の現状を全国と比較しながら、その特徴を描いている。また詳細なデータを紹介しながら、中国・四国地方の傾向や問題点を整理し、そのなかで山口県における「小規模・高齢化集落」について解説されている。

この本はまさに山口県の地域福祉のテキストである。

学生たちの関心事としては、全国の動向だけで地域福祉を理解するよりも、自分たちが暮らしている「地元」のことを通して理解する方が「実感」を伴う。

とくに新しい分野の学習をするときには、いきなり国の動向ばかりを知るのではなく、まず身近なところの現状を知ることの方がイメージはしやすい。地域福祉は身近な地域社会を大切にするといいながらも、教えているテキストはそうっていない。当たり前のことであるが、全国版を意識するとそうになってしまう。

このことは最近の学生たちの学習傾向として、

最初から抽象的な概念や理論について理解を促すよりも、具体的な事象を積み上げていく方が、学習理解が容易であると言われる。実際に総論から各論へとシラバスを展開するよりも、各論を重ねていくことで総論をつかんでいくという従来とは異なるカリキュラム体系が注目されていることとつながる。その意味で、本書は地域福祉のローカルテキストであり、かつ身近なコミュニティを知ることから地域福祉の全体を理解できるようにするという構成の意義は大きい。

2. コミュニティへのアプローチとして「調査できる力」をつける

第2章では、社会福祉調査の方法について解説されている。この章はとくに読者との対話によって内容が理解できるように工夫されている。たとえば「わたしたちの身のまわりにあるものを想記してみよう」といった、読者の気づきを促すような記述に徹している。

調査について経験のない学生たちにとって、そもそも調査とは何かを伝えることは難しいことである。単なる調査論ではなく、本章では学生たちが自ら調査ができるような力を養成することを意図していると思われる。そこでより具体的な事例を示しながら、調査をすることの意義だけではなく、その手法やコツ（留意点）までも詳しく解説している。

調査とは何か、あるいは調査方法についての解説書の類は多いが、読者が実際に調査をできるだけの力をつける本は少ない。本章ではそのことが事例を交えて、わかりやすくまとめられている。

そのことの象徴的な部分は、学生が実際に演習

論文を作成するときに実施した質的調査の「依頼状」の例が掲載されているところである。これを読んだ学生たちは、先輩たちが実際に実施したであろう調査のことを思い、自分たちもできる、あるいはしなければならぬという意欲さえ喚起されるのではないだろうか。一般書では、とても真似のできないことである。

最後のところには、この節が『地域で住民の皆さんが社会調査を行うための手引き』（山口県社協）をベースに書かれていることが紹介されている。この「住民参加型調査」は、最近のコミュニティワークでは大変注目されている。とくに小地域福祉活動を住民主体で進めていく際に、地域住民自らが調査の設計から実施、分析までを行う。ただしここで重要なことは調査プロセスであり、その作業を通して地域住民自らが地域の問題を発見し、問題を共有し、問題解決のために協働していくという支援である。調査の作業過程が、住地域福祉の主体形成につながるという支援である。

調査を専門機関に委ねてしまうのではなく、ソーシャルワーカーとして必要な知識と技法を身につけておくことは、地域福祉の推進にとって益々必要な力量である。その意味からも、コミュニティへのアプローチのひとつとして、「調査できる力」を身につけられる本書は貴重である。

3. コミュニティエンパワメントの視点

第3章では、「コミュニティが備えている力を引き出す」という、なんとも魅力的なテーマがつけられている。具体的には1) 住民懇談会の進め方、2) ふれあい・いきいきサロンの実際、3) 精神保健福祉におけるコミュニティワークの実際という3つの切り口から整理されている。

どれも具体的な事例に基づいて執筆されていることは、他の章と同様である。たとえば、住民懇談会などは、呼びかけるチラシの例まで掲載されていて、これもまた経験のない学生たちが、地域でどう住民たちが「協議する場づくり」をしていけばいいのか、イメージができるように工夫されている。とはいえ単なるハウツーの紹介ではない。

そこに内在する社会学などの理論に基づいて、コミュニティワークとして何を大事に展開していけばよいかが解説されている。

この章の冒頭に、草平先生が「地域社会に住む多くの人々にはお互いが助けあう気持ちが潜在的にある」と述べている。そもそもコミュニティには支えあう力が潜在的にあり、それを引き出すことがソーシャルワーカーの役割のひとつであるという視点は、山口県の地域福祉を熟知された先生の結論なのであろう。当たり前のように思われるかもしれないが、地域福祉の方法論としては、こうした地域の福祉力を0から構築する立場に立つか否かでは大きく異なる。まだ県内の地域には潜在的な力があることを信頼しているからこそ、このような記述に収斂されるのであろう。

いずれにしても、コミュニティのアプローチとして、第2章で示された「調査」という視点と、内部から引き出すという「エンパワメント」の視点を対として構成されていることは見事である。エンパワメントというと個人のことに思われるかもしれないが、「コミュニティエンパワメント」という、まさに地域の福祉力をどう高めていくかという点が注目されている。そのためには、従来からのコミュニティワーク（地域組織化）と個別支援と地域支援をつなげていくコミュニティソーシャルワーク（地域自立生活支援）といった方法が注目されているが、それらを本章ではバランスよく紹介されている。

4. 学内の教員間の共同と県社協との協働

本書の「おわりに」で学部長である田中先生が「学部内で専門の異なる教員が、統一テーマについてそれぞれの角度から書き著す機会を得たことにより、著者同士が作成過程で論議を深めたことにより、学部の組織的教育力の向上に大いに資するものである」と述べられている。本書は特色GPの成果のひとつであるということであるが、その成果として組織的教育力が向上したということは優れて評価される点である。

本書において、その企画意図が成功している鍵

は、「地域福祉とコミュニティへのアプローチ」というテーマ設定にあると思われる。地域福祉だけをテーマにするのではなく、地域福祉とコミュニティを並べたことがユニークであり、学際的なアプローチのテキストとして範囲の設定がよくできている。

同時にテキストとして、学生たちに何を伝えるかという協議が相当なされていたのではないかと推察される。日々教えている学生たちの顔を思い浮かべ、彼らに伝えるべきメッセージ、さらに言えば学生たちの理解度や経験値などが教員側にも共有されていたが故に、複数で執筆されているにも関わらず、難易度のレベルがそろっているのである。

市販されているテキストのなかには、執筆者によって難易度がバラバラで読みにくいものが多く見受けられる。しかし誰が読むかもわからない一般書では、執筆する側もつらいのが本音である。ところが本書については、それらが克服できているのである。ローカルテキストであると先に述べたが、本書は山口県立大学の学生たちのために、山口県立大学の先生たちが執筆したという、まさに「オーダーメイドテキスト」であるとも言える。それ故にテキストとしての完成度が高いのであろう。

さらに付け加えるならば、第3章3、第3章2-1は山口県社協により発行された原稿を元に執筆者が加筆修正されたものであるが、それらは普段からの県社協と貴大学の協働による成果であるといってもよい。そうした背景があるが故に、より実践的な内容になっているのであろう。

5. 本書への期待として

すでに出版された本に期待するというのは変な言い回しであるが、評者としては、このテキストが実際に学生たちにどう授業され、その教育効果がどうであるかをぜひ知りたいものである。市販されている標準テキストと比較して、こうした独自のテキストを教材として用いることが、ソーシャルワーカー養成においてどういう意味を持つ

のかは、今後の日本の社会福祉教育を考えていく上で、有用な示唆を与えられると思われる。そのことへの期待である。

テキストとしてひとつだけ注文を申し上げれば、第4章はやはり「地域福祉のこれから」ではないだろうか。学生たちが一人の地域住民として、あるいはソーシャルワーカーとして地域福祉をどう担っていくのか。そのときには山口県にとどまらず、世界へ羽ばたく彼らに対して地域福祉はどういうメッセージを伝えられるか、このことは私たち地域福祉研究者にとっての宿題でもある。

(日本福祉大学社会福祉学部准教授)

リプライ

地域における諸課題を顕在化し、学生の問題意識を醸成すること

草平 武志

1 はじめに

拙書は、本学部が特色GPに採択されたことを機に、山口県立大学においてそれぞれ、地域福祉、社会福祉原論、社会学、精神保健等、現代の地域福祉とコミュニティへのアプローチに関わる諸科目を担当している専任教員が協働して、地域福祉、社会福祉調査教育に関わる教材として活用するために作成したものである。これに対して日本福祉大学の原田正樹先生に書評をいただいたことに深く感謝申し上げる。

原田氏は、日本地域福祉学会及び日本福祉教育ボランティア学習学会の理事職と務めるかたわら、長野県茅野市、富山県氷見市、三重県伊賀市をはじめとする全国の地域福祉実践に深く変わり、地域福祉、福祉教育に関する実践と理論研究を統合されている気鋭の研究者である。

2 地域福祉のローカルテキストとしての意義

今日、私たちの日常の生活の中で、在宅福祉サービスをはじめ、極めて身近なものとなっている。これらの福祉サービスと学生をはじめとした学習者に対して、地域福祉への喚起し、地域社会の課題への取り組みのおもしろさ、難しさを提示できればと本書を刊行したものである。

地域における諸課題を顕在化し、学生の問題意識を醸成する、あるいは、地域社会への接近の方法としての具体的な調査の方法を提示するなどの思いで本書は構成されている。

特に、過疎高齢化の進展する本州の西端の山口県に所在する本学の環境に立脚し、学生への問題の喚起の視点から著されているため、やや特異な立場での記載となっている。これまで地域社会の

課題に感心を多くははらわなかったであろう学生に対して、地域課題の存在を明確にし、学生に問題意識を醸成し、学習に結びつけることを意図し、学生に身の回りの「具体的な事象を積み上げて」いき、学習理解を容易にさせる方法をとっている。原田氏の指摘にある「ローカルテキスト」としての意義は、とりわけ地域福祉の教育にはこのように身近で具体的な事象を積み上げていく方法も教育上有効な一つの方法であると考ええる。

原田氏の指摘にあるように「コミュニティには支えあう力が潜在的にあり、それを引き出すことがソーシャルワーカーの役割のひとつであるという視点」は、山口県という地域社会を事例にあてた場合にいえることであり、全国的に普遍化できる視点ではないかもしれない。「地域の福祉力を0から構築する立場に立つ」視点からの地域福祉の方法について、本書では取り上げられておらず、今後考えていく必要があるといえる。

3 地域社会との協力関係

共編者である高野和良氏と筆者は、赴任以来10数年の間、山口県社会福祉協議会において「地域福祉推進委員会」「ふれあいのまちづくり事業評価委員会」「社会福祉協議会評価委員会」等の委員を務めることなどを通じて、山口県内の市町村社会福祉協議会を中心とした地域福祉実践をくまなく拝見させていただき、先達の業績に触れ、また今日の地域福祉推進の方法について実践現場から多くの示唆をいただいている。全国の地域福祉実践活動を研究者の立場として支援、研究されている原田氏から「普段からの山口県社協と山口県立大学の協働による成果」と評価いただき感謝し

ている。

また、本書では紹介しきれていないが、本学のある山口市宮野地区（校区）の地域住民の方々との協力関係について、今後は、まとめていく必要がある。交通の便の悪い地方都市に所在する宿命として、学生の9割近くは、入学と同時に、本学周辺で生活を行うこととなる。学生の生活する地域社会での営みに、学生が関心を寄せ、地域の課題に接近し、課題を明確化し、あるいは課題解決に取り組むことは何よりも学習の機会と考える。そうした営みは、社会福祉学部の開学以来から続けられ、特色GPでの取り組みの大きな柱となっているが、本書では分析しきれていないのが実情である。こうした大学周辺の地域社会とどのように地域福祉の研究者として関わるのか、あるいは、4年という限られた学生という市民として地域社会に関わるのか、地域福祉の視点から解明しなければならないと考えている。

4 さいごに

本書は、特色GPを契機に刊行された一連のブックレットと同様に教材として活用するために作成した。本書の作成過程において、本学で教育するにあたり関連の教員が、教育内容を相互に確認し、学部の組織的教育力の連続性をもたせることを意図したものである。ご指摘の教育効果については、十分な議論がなされていないのが実情である。今後の課題とさせていただきたい。

「地域福祉のこれから」については、原田氏の指摘にあるように、本書には十分論述していない。山口県は、高齢化率の上昇、人口減少という21世紀の日本社会の課題を先んじて経験しており、こうした地域社会を研究することは、今後の日本の地域福祉の普遍的な課題に挑むことともいえる。筆者においては、山口という地域社会を題材に導入を図り、地域福祉実践、並びに地域福祉研究の課題としたいと考えている。

